

『本哥取絵入百人一句』小考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5658

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『本哥取
絵入 百人一句』小考

江 本 裕

はじめに

筆者は先だつ「『清水千句』考」(『大妻国文』42号、平成23・3)で「『本哥取 百人一句』」にも及び、「翻刻・影印」『本哥取 絵入』「百人一句」(早稲田大学貴重本研究會／雲英末雄・伊藤善隆・二又淳氏編、「早稲田大学 図書館紀要」53号・平成18・3)で、雲英氏等が主張された(主に雲英氏の主張と考える)、西鶴編の『生玉万句』・山口清勝編の『清水千句』双方に出座・主催した旧派の清勝が、自分の立場や自派の結束を強めるために旧派の俳人たちの作を多く収録して『本哥取 百人一句』(以下必要に応じて、『本哥取百人一句』と略記する)を刊行したのではないかと主張されたのに対し、筆者はどちらかというところ、「清水千句」の発見・紹介者である牛見正和氏の、清勝が西鶴との融和をはかるための『清水千句』の興行であったとされる見解(牛見氏「新収俳書『清水千句』―解題と翻刻、「ピブリア」117号・平成14・5)に近い立場をとっていた。即ち西鶴への対抗意識はさほどなかったのではないかと考えていたのであるが、『本哥取百人一句』を検討してみても、必ずしもそうではなく、旧派・新派の対立云々は別に、少なくとも西鶴への意識はかなり強かったと考えるに

到った。

該『百人一句』解題の冒頭には平成元年十一月の東京古典会の入札会に出品されたのを落札した旨が記されている。実はその時、筆者自身も大妻女子大学に在職していて札を入れたのだが、あえなく敗れて、依頼した書肆に落札額を聞くと予想よりはるかに高額であったことを知り、むしろサバサバして安堵した記憶があるのだが、かなり時期を経たのち雲英氏に話す機会があり、いつだったかは明確に覚えていないが、雲英氏がコピーを送ってくださった。

そんなこともあったので、雲英氏等の稿が公刊されたのち、筆者も検証・確認を考えているうちに雲英氏が急逝された。拙稿『清水千句』考』は逝去されたあとで、コピーと前記早大「図書館紀要」も頂戴していて、不覚にも雲英氏の平成十八年十月に奈良大学で開催された俳文学会での研究発表、『本書取入百人一句』をめぐって』を全く失念していて、尾崎千佳氏からレジメのコピーを恵与され、内容の殆どが図書館紀要の内容に連接することを知って安堵している処でもあつた。ただし『清水千句』考』には言わずもがな、蛇足の部分がかなりある。その事実を明確にすると共に今回遅ればせながら該「小考」において、少しなりとも学恩に報いることができればと筆を執る次第である。

一 『本書取入百人一句』の連衆

雲英氏の奈良大学での発表は、レジメによる限り、該『百人一句』紹介・検証に始まり、『清水千句』の連衆の主要俳書における入集状況、寛文十一年正月刊の『蛙井集』巻五付句のあとに付される跋文の言説（軽口を童戯と非難）から、清勝が旧派の立場を持ち、自派結束のための『清水千句』刊行であり『本哥取百人一句』の上梓であった主張されたようであり、その説はそのまま前記「翻刻・影印」（本書取入）『百人一句』解題の四「本書の意義と位置付け」に繋がっている。

既に雲英氏解題の二「本書の特徴」が記す通り、「本哥（百人一首）の詞にすがりたる句を百の数集めて」（序）句作す

る趣向は清勝の新しい試みであった。その際、何首目の和歌を誰に依頼するかは当然清勝が司ったはずで（もし任意に提出させたら大混乱となる）、これが百人ともなればその選択も相当に面倒となる。依頼する俳人の世間的評価も勘案しなければならぬだろうし、百首の和歌についても知名度に差があるだろう。ともかく作句範囲が限定されるわけだから、依頼する方もかなり神経を使つたであろうことが容易に察せられる。

既に長頭丸（松永貞徳）は死去しており（承応2没）、貞徳の高弟に依頼するか自身で代作することになる。また『百人一首』で著名な歌（小野小町・在原業平・和泉式部等々）、高貴な身分の方（陽成院・順徳院・祐子内親王等々）、更には俳壇の宗主的な人士や古俳（梅翁・玖也・保友等）にもどの和歌の句作を誰に依頼するか、これにも配慮を要したであろう。しかして如上に関する考察の余裕は現在の筆者にはなく、その基礎となるようなものを少しでも提示し、西鶴との関係を示す手がかりの一つにもなればと考えて、今稿では連衆の実態を少しでも明らかにできたらと、この「小考」を試みる次第である。

なお雲英氏等の稿は百人の構成を、京二名、大阪七十七、和州六、堺三、尼崎二、三田二、備中二、河内・平野・桜井・下田村・佐橋・土佐各一名とされるが、作者の居住地を明示する所を基本とし、それ以外は大坂と判断したきらいがないでもない。今稿では少し大胆に推測してみる。なお、以下では便宜通し番号を付けるが、その77番に当たる「和州舜夕」は「受夕」、解題の三「入集者について」（4頁）の「和州」で、「夢夕」も「受夕」、「正威」は「正盛」（本文では正盛）、桜井一名の「金成」は、該当者がいないようである。

入集者一覽

京 1 京鶏冠井氏令徳 2 京長頭丸

（以上二名）

大坂 3 天王寺道寸 4 松山氏玖也 5 半井氏一六 8 沢村氏友勝 9 伊勢村意朔 11 井口氏如貞

			13 片岡氏旨如	17 源長 一步	18 伊勢村重安	20 加藤氏勝明	21 西山氏梅翁	22 藤山氏友之
			23 大平氏伯貞	24 喜多村氏立以	26 古河氏定圃	27 大坂七歳きさ女	30 浅沼氏賛也	31 高瀧氏以仙
			32 牧野氏一得	33 重貞	34 大坂 器音	35 友田氏常朝	36 藤原氏貞因	38 高木氏松意
			42 山田氏常重	46 松坂氏一飛	47 大坂 龍信	48 隅田氏路春	50 大坂 慶閑	52 前川氏由平
			58 林氏 定軌	59 喜多田氏為親	60 中林氏宜休	61 小嶋氏良賢	62 藤原氏言因	64 大坂 悦春
			66 若林氏良久	67 木原氏喜遇	70 井田氏正春	72 広岡氏宗信	73 藤原氏貞富	76 高山氏三昌
			77 佐橋吉孝	78 藤田氏不三	80 豊嶋氏当黒	81 岩橋氏豊春	82 小野氏松緑	84 十三住重吉
			87 大坂季延	88 桜井 重成	89 高岡氏成林	92 北峯氏正甫	93 西田氏久任	95 大坂 初知
			96 山口氏きは女	97 山口氏清勝	98 林氏定親	100 梶山氏保友		(以上58名)
大和	10 正辰	29 和州 信昌	37 下田村葦葉	56 和州 自延	68 正広	74 和州片岡清貞		(以上9名)
	75 和州 雪正	79 和州 受夕	85 和州今西氏正盛					
三田	6 光重母	7 重友妻	14 三田中村氏女	15 貞順	25 重友	40 炭導		(以上11名)
	54 了祐	55 三田中村氏重香	69 信方	71 光重	83 幽歩			(以上3名)
堺	16 堺 長治	51 堺阿知子顯成	94 堺池嶋氏成之					(以上3名)
備中	12 備中住信盛母	63 吉岡氏信方	99 備中 信元					(以上3名)
尼崎	28 尼崎衣笠氏宗政	41 尼崎衣笠氏友保						(以上2名)
河内	45 河州三田氏浄久 (1名)		平野 44 平野勝政 (1名)		土佐 91 土佐円満寺皆虚 (1名)			(以上9名)
留保	19 忠政	39 和田氏振女	43 吉次	49 出来氏昌信	53 西川氏旨流	57 沢山氏久明		
	65 吉次妻	86 音雪	90 光禪寺秀金					

注記

大坂に出す84の重吉は「十三住」とあるように、同じ清勝撰の『蛙井集』の句引では「摂津国 十三 重吉」と同一人と判断している。大坂とは区別しているが、あえて大坂に入れておいた。また77の佐橋吉孝を雲英氏稿では解題の三「入集者について」では「佐橋 1名 吉孝」とされる。筆者の受ける感じでは「佐橋」を地名と判断され、多分大和の在所名とされていたのではないかと推測しているが、管見の範囲大和では見いだせない。寛文五年八月刊、野々口立圃撰の『小町踊』では「佐橋／吉孝」で八句入集しているが、該書には句引がなく居住地は分からない。『小町踊』各掲載句の作者名右上に姓名または居住地を混合して掲出しており別は困難である。筆者は、寛文三年三月刊の成安撰『埋草』の句引が「摂津／住吉住／吉孝」とするのを勘案して、便宜、「大坂」に配しておく。

まず、留保したのが九名。全体の一割近くに達する。43の吉次、65の吉次妻であるが、同一書に入集する以上は当然夫妻と考えるべきだろう。吉次を号する俳人は非常に多く、雲英末雄氏監修の『元禄時代俳人大観』（全三巻・八木書店刊）の第三巻に付される今栄蔵氏著の『貞門談林俳人大観』をも索引化した、その両索引によれば、該号はゆうに八十を超える。西鶴に関しても『生玉万句』に種村吉次、『独吟一日千句』の追善発句に豊田吉次、延宝四年刊の『大坂歳旦』引付に友田吉次・矢住吉次として、その特定はきわめて困難である。付言しておくところ今般公刊された『元禄俳人大観』に付された、今氏『貞門談林俳人大観』を含めての索引化は大変便利で、これで近世前期の俳諧のほぼ全貌が居ながらにして知られるようになった。今稿もその学恩に与っており、雲英氏並びに編者の佐藤勝明・伊藤善隆・金子俊之の各氏に深謝する次第である。

そこで同じ撰集で夫妻ともに入集する俳書はないかと注意すると、延宝元年刊、渡邊友意撰の『旅衣』に、「尾張国名古屋」に「柿沼氏／吉次 二」「柿沼氏／吉次妻 一」を見いだせた。しかし名古屋は離れすぎており、前掲『蛙井集』

でも尾張からの入集者はいず、むしろ清勝の勢力範囲は大坂以西が圧倒的に多い。しかもと撰・河・泉に絞ってみても入集俳書は二十に達し、吉次を号する者は和泉堺が九、大坂の三がこれに次ぐ。しかも前記西鶴関係で提示した名前と重複する者もいないので、特定は無理と判断した。

以下はできる限り簡略を期す。53・86・90の西川氏旨流・音雪・秀金は現在の処全く手がかりなし。秀金は「光禪寺」がヒントになるかもしれないが調査に及んでいない。39の振女はわずかに「越路草」(延宝5く6刊)に「福居住／□□安十女／振女 一」を見出すものの別人と判断。19の忠政は京・大和・河内・大坂・和泉に分散して特定できるに足る資料を持たない。49の出来氏昌信も八例見出せるが美濃の国が三例と多く(うち赤坂・谷氏が二例)、清勝との縁はつけがたい。残るは57の沢山氏久明だけとなるが、久明は「桜川」(延宝2成、松山玖也・内藤風虎撰)に「岩城住／穂高／久明」で二十七句の入集をはたし、『六百番誹諧発句合』(延宝5・12刊)に出座して相応の実力を評価されている久明を見出すことはできるが、当人なら何らかの所付や肩書が付されたはずで、躊躇せざるをえない。

次に大坂からの入集者でゴチックを施してあるのは『哥仙^{大坂}』(以下『哥仙大坂』と略記)再撰本の入集者である。上記を含めて大坂からの入集者については特別な例を除いて贅言を控える。念のため記すと、95の初知(中堀氏)は初撰本には入って再撰本の段階で除外され、逆に97の清勝は初撰本では入集せず、再撰本の時に入集した人である(野間光辰氏「大坂歌仙の初撰本をめぐって」、『西鶴新新攷』、岩波書店・昭和56に詳しい)。また、4松山玖也、9伊勢村意朔、11井口如貞、18伊勢村重安、21西山梅翁、23大平伯貞、24喜多村立以、31高瀧以仙、32牧野一得(斎田氏で出る)、35友田常朝、36藤原貞因、38高木松意、48隅田路春、52前川由平、59喜多田為親、60中林直久、61小嶋良賢、66若林良久、70井田正春、72広岡宗信、73藤原貞富、81岩橋豊春、82小野松緑、84十三住重吉、87大坂季延、96山口きは女、98林定親、100梶山保友。

以上で二十八名となるが、彼等は清勝の処女撰著『蛙井集』(寛文11・1刊)に入集している大坂俳人である。その数

は大坂入集者のほぼ半数に達する。大坂以外にも大和の29信昌、37葦葉、74清定、79の受夕、85正盛が入集、尼崎から28の宗政、41友保も入っていた。なお巻頭京で去御方に続いて長頭丸（松永貞徳）ではなく鶏冠井令徳が座るのは、令徳が清勝の最初の師であるからだろう（野間光辰氏定本西鶴全集11上）。

更につけくわえると、西鶴が『生玉万句』の興行に大成功を収めた（寛文13年2月25日から12日間）直後に清勝が一日で興行した『清水千句』（寛文13・8刊）にも大坂から、35の友田常清、36の藤原貞因、42山田常重、48隅田路春、67木原喜遇、73藤原貞富、81岩橋豊春、82小野松緑、そして84の十三住重吉も参加。尼崎から41衣笠友保も出座していた。

なお既に雲英氏の指摘する処だが、該『本哥取百人一句』が刊行された延宝三年の歳旦帳、『俳諧三ツ物揃』に清勝も歳旦帳を掲載、その中には清勝―友保―路春の三物（3組9句、それぞれ97・41・48番）、元日発句にはキハ女（96の山口氏きは女）・七才女・常重（42番）・正春（70番）が名を連ねていた。七才女は清勝の娘、寛文十二年刊の桑折宗臣撰の『大海集』句引によると、きは女は清勝の妹に当たると推測される。

以上を概括すると、寛文末から延宝初年における山口清勝は、一定の教養に恵まれた家族と親しい同輩と弟子に恵まれ、大坂を中心としながらも五畿内をはじめ、北陸の金沢や大阪以西の諸国（土佐・豊後等）にまでも一定の影響力を持つ俳諧師となっていたと推定されるのである。

そこで今回は、摂津の国三田に注目してみたい。三田（現兵庫県三田市）は清勝の撰集等で『本哥取百人一句』に初めて登場する近郊地帯である。参照する資料は延宝六年孟春刊、生白堂行風撰の『有馬名所鑑』（目録題は『有馬大鑑迎湯抄』）。行風は大坂の人、狂歌で広く知られ、俳諧では松江重頼系と言われ（俳文学大辞典）、西鶴の『歌仙大坂』にも撰ばれている。三田は『有馬名所鑑』では「三田庄 有馬郡」で「作者之目録」には出る。その三田庄で最も名を馳せるのが重香（中村氏）で、俳諧では「玉海集」（明暦2刊、一囊軒貞室撰）に発句六・付句四が入集するのが初見。『元禄大観』の索引によると、俳書への入集は十一集に及ぶ。狂歌では『後撰夷曲集』（寛文12刊）に三首、『銀葉夷歌集』（延宝

7刊)に十九首、『有馬名所鑑』の「作者之目録」では狂歌七十七首・発句三十五と「三田庄」では狂歌・発句ともとびぬけて多く(もつとも筆者の確認では狂歌71、発句30)、狂歌的な素養を必要とする『本哥取百人一句』においては、ふさわしい人物だった。

それはそれでよい。ところが40の炭導になると俳諧関係では全く手がかりを得ないのが、「三田庄」では、狂歌は零ながら発句「二句」と出るのである。ここだけ実例を示す。

平兼盛哥　しなふれといろに出女よ馬鹿をとり　炭導　(本哥取百人一句 40)

ひの、まきは瓜屋の客のとめ湯哉　炭導　(有馬名所鑑 卷二 二之湯 瓜屋)

地こく谷に見る目かく花の盛哉　炭導　(有馬名所鑑 卷三 地獄谷)

そういう目でみてゆくと『本哥取百人一句』には69と63に「信方」が二箇所出るが、そのうち後者の吉岡信方については該書99の、『崑山集』(慶安4刊)に発句三十二、『大海集』(寛文12刊)に発句九十五、『続連珠』(延宝4刊)に発句二一七を入集して我々を驚かせ、かつ該書では巻軸の前を担当して注目される備中新賀の吉岡信元と一族か縁戚関係にある人物と考えて間違いないのだが、もう一方の信方とはなかなか出会えず、「三田庄」の「田中氏/信方 二首」に頼らざるを得ない。逐次の検証をする余裕は現在なく、54の了祐も『続連珠』の「越前/森田淨因寺/了祐 七」よりも、「三田庄/釈/了祐 一首・三句」を採るべきと考える。83の幽歩は『元禄大観』の索引が『続山井』(寛文7刊、湖春撰)の「三田/幽歩」しか出さないので、これも三田と決めて大丈夫だろう。念のため『有馬名所鑑』の「三田庄」に即くと、狂歌四首と発句一が確認できる。15の貞順については俳諧での索引には七集が掲出されているが、その中の『点滴集』に「撰津国/大坂三田/貞順」とある。「大坂三田」は大坂住の三田氏、あるいは大坂の三田という土地とも解される。そこで天理図書館善本叢書の39に収録される影印で確かめると、「三田/貞順」であった(『有馬名所鑑』には入集していない)。

最後に6の光重母と7の重友妻並びに25の重友、71の光重である。先に吉次の所でも触れたが、光重・重友共に俳諧の索引では掲出数が頗る多く、かつ地域も分散している。しかも兩人ともとも夫妻で出る撰集は皆無。光重は大坂では一例だけで（もつとも京・但馬等近郊は多い）、重友は大坂に六例と多く、かつ『蛙井集』に「大坂／露氏／重友」がある。その代わり「三田／重友」が『続山井』に一句、『続連珠』に一句あった。

ならば「三田庄」ではどうなっているかというところ、光重は山添氏、狂歌二十二首、発句十一句。対するに重友は福井氏、狂歌十三首、発句二十二句と記されている。重香には及ぶべくもないが二人が二・三位を占める。ただし「作者之目錄」には「光重母」「重友妻」は出ない。根拠薄弱かもしれないが光重、重友の占める地位、他に連衆が多く参与している可能性の高いことなどを勘案して、一応三田に措定しておく。残るは14中村氏女であるが、雲英氏は重香の娘と判断して三田に配されたと推測する。正当であると考ええる。因みに、「三田庄」に載る限りにおいても中村氏は三名いる。重香・重貞・重義に中村姓が付いている。「三田庄」に録される人数は十四名であるが中村氏女は入っていない。しかし可能性としてはやはり重香の娘が高いだろう。穏当な判断だと考える。いま一つ弁明しておくところ、33の重貞を筆者は大坂に配したが、実は先にも触れたように三田にも中村重貞がいる。重貞は『蛙井集』にも「大坂／重貞」で入集、『落花集』『難波草』（共に大坂）にも入集するので大坂に配した。因みに「三田庄」の重貞は狂歌三首、発句十二句である。該重貞も三田の可能性ないこともないと考えている。

いま一つ、筆者が以前から気になりながら依然として未解決の課題なのだが、それは該『百人一句』でも巻軸の前（99）と鄭重に遇されている備中の吉岡信元のこと。信元は前述『崑山集』以降、一地方俳人でありながら破格の厚遇を受けて多くの俳書に入集を果たし、『生玉万句』にも孫（祝賀発句）と共に入集を見せ、『大海集』『千宜理記』などにも「信盛母」と共に入集している。筆者は信元の出自は武士、大坂の陣では豊臣方としての出陣、在京時代を想定し、未解決のままいたずらに時間を空費している。備中では在田軒を号し郷土史にも関わったようで、現在岡山県笠岡市在住の高

木浩朗氏を中心に郷土史研究会が活発に活動されている。『大海集』では「備中国 新賀村住」で吉岡信元（95句入集）・信元娘満子・信盛母・信盛・信章が入集しており、いずれも血縁か縁戚関係にあったと推測している。もしご存じの方であれば、是非教示をお願いする。

さて、「三田庄」の人々は狂歌に携わる人士が多く、作品が『有馬名所鑑』であることも勘案しなければならないが、狂歌も俳諧をも嗜む教養人であったことが感得される。『蛙井集』や『清水千句』には全く参与してはず、その意味では清勝の『本哥取百人一句』の企画にはふさわしい文化圏であった。多分清勝から重香を通しての働きかけによる集団参加だったと推測されるが、それが清勝の市場開拓、自派結束のための策と考えるか、百名という大量の企画にふさわしい人土を集めかねての窮余の策だったのかについては今は問わない。ともかく企画は成就してユニークな俳書は刊行されたが、伝本の残存状況から、この企画が必ずしも大成功だったとは言えないようである。

二 清勝と西鶴

最後に雲英氏が強調された、清勝の西鶴への対応の仕方である。前節「入集者一覧」の「大坂」で記したように、ゴチックで示すのが『哥仙大坂』再撰本への入集者である。合計二十一名。一覧すれば、すぐに当地大坂を代表する俳諧師がほぼ網羅されていることが了解されるだろう。それとまず、『哥仙大坂』に入集しながら『本哥取百人一句』に採録されなかった俳人を列挙してみる。

空存 鶴永 秋月 方女 遠舟 不琢 醉鶯 素玄 忠由 宗久 ゑいしゅん 行風
休安 無睦 休甫（座順に従った）

以上十五名。右のうち巻頭と巻軸に座る花島坊空存と津田休甫は大坂俳壇の最古老で既に物故者、片山秋月と蔭山無睦

も古老で特に無睦は残る句作が少ない。八木宗久は平野の富裕町人でむしろ連歌の世界での著名人、生白庵（堂）行風は狂歌の方が主であった（『本哥取百人一句』は狂歌的センスも尊重されるが）。

あれこれ勘案すると、筆者が首をかしげるのは、井原鶴永（延宝2年の歳旦吟から西鶴と改号）、和氣遠舟・藤田不琢・中林素玄・谷忠由くらいである。なかでも『生玉万句』の興行に成功し、初めて大坂で三十六人を撰ぶ『哥仙俳諧師』の撰者となった鶴永に依頼しなかったのには（清勝は『生玉万句』巻頭の第三句目を務めている）、何か特別な事情があったと思わざるを得ない。思い当たるのは『哥仙大坂』再撰本刊行の一ヶ月前に発刊された初撰本『俳諧歌仙画図』では採録されていず、再撰本によって復活したことを根に持ったこと、同じことは和氣遠舟にもあてはまり（遠舟も初撰本には入っていなかったと考えられている）、清勝が『生玉万句』が初見の遠舟と同列に扱われたことへの不満、腹いせに除いたことくらいである（以上についての事実関係は野間光辰氏前掲「大坂歌仙の初撰本をめぐって」を参照）。いまその事情を明確に示し得ないが、清勝が『本哥取百人一句』で西鶴を除外したのには、大坂俳壇の趨勢をみるかぎり、きわめて不自然であった。そこには何らかの感情的軋轢があったとしか考えられない。

いまこれを西鶴サイドから見るとどうなるか。周知の通り、清勝が該書を刊行した延宝三年春月を三月とすると、その翌月の四月には、三日に三人の子供を遺して西鶴の妻が死去する。西鶴は同月八日に亡妻追善のために『独吟一日千句』を営み、一〇五名に及ぶ大坂俳人（近郊者を含む）の追善発句を付して刊行した。追善句には師西山梅翁を巻頭に、松山玖也・梶山保友等大坂俳壇の重鎮を始めとして、大坂と関わる殆どの俳人が名を連ねるが、清勝の句は見あたらない。翌延宝四年正月には『三発句大坂歳旦三発句』と題して三物九組（81句）、引付三五〇句に及ぶ龐大な歳旦帳を本屋安兵衛から刊行するが、該歳旦帳にも清勝の名は見いだせない。

西鶴の編著に清勝が復活するのは延宝四年十月刊の『古今俳諧師手鑑』からで、全二四六句中の二〇六番目に「大坂山口清勝 花に酌や今一しほの色上戸 清勝」が採録される。以後、延宝八年四月興行の『西鶴大矢数』（4千句独吟）

には役人のうちの「脇座」を務め、新大坂歌仙に相当する『山海集』（延宝9・3刊）、『百人一句難波色紙』（天和2・4刊）と続き、三都から三十六人を撰ぶ『三ヶ津』（天和2・4刊）、諸国から六十六人を撰ぶ『高名集』（天和2・4刊）には入集することができなかった。

以上のことから、西鶴が『本哥取百人一句』から外された延宝三年春月から約一年半は、感情のもつれが二人の間にあったと推定できる。しかし『古今俳諧師手鑑』以降はスケールの大きな編著には顔を出さずようになり、『西鶴大矢数』の興行では脇座に座り、翌九年五月に刊行された該書跋文の、「惣而此道さかんになり、東西南北に弘る事、自由にもとつく俳諧の姿を、我仕はじめし已来也。世上に隠れもなき事、今又申も愚也云々」の自身たつぷりというか、自慢たらしい長口上を読んだはずである。

もともと、清勝が西鶴と連句の席に同座したことは『生玉万句』を除くとなかったようである。清勝が西鶴と俳席で話に花を咲かせる体験は殆どなかった。というより、索引による限り、連句の会出座の記録は残されていない。これも雲英氏等の学恩によるのだが、『元禄時代俳人大観』に付される今氏著の『大観』を含める索引によると、延宝期を過ぎてからの清勝の俳諧活動は極端に少なくなる。現在貞享に入ってから清勝の活動は歳旦帳に二例を見るだけである。一は『貞享三年歳旦帳』の「重栄歳旦帳」で「重栄一政頼一清勝」の三物、二は同年の「清勝歳旦帳」で「清勝一きさ女一沙門一来真」の三物を最後にその名を見出せなくなる。逆に言う山口自足子清勝の歳旦吟詠は多く、清勝はごく限られた、親しく、気心の知れた特定グループ内での心の通いを重視し、その意味では西鶴のあくまで外に視界を拡げていく外交的な俳諧活動とは質を異にしていたように思われる。『蛙井集』や本『本哥取百人一句』はその中で異色の編著であったと称してよく、彼の資質の一部は『蛙井集』の序文や跋文に示されているように思うが、西鶴とは対照的な人柄の持ち主であったことはまず間違いないようである。

清勝の没年が未詳の今、断定的なことは言えないが、延宝を過ぎてからの清勝は、殆ど斯界から姿をけしてゆく。清勝

「がおのれの俳諧にかなりのこだわりを持つ人であったことはおおよそ見当がつくが、どこまで自派拡張に執着していたかについては疑問なしとしない。もう少し彼の言説を読みこんで、機会があったら私見を述べてみたいと思う。以上でどこまで雲英氏の御好意に応えられたか甚だ心もとないが、一応の私見を述べてこの「小考」の筆を措くことにする。